

## 学位請求論文の内容の要旨

論文提出者氏名	医科学専攻総合医療・健康科学領域 精神・発達医療学教育研究分野 吉田 恵心
(論文題目) The factor structure and construct validity of the parent-reported Inventory of Callous-Unemotional Traits among school-aged children and adolescents (学齢児童と生徒における親評価 CU 特性尺度の因子構造と妥当性)	
(内容の要旨) <p>【序論】Callous-Unemotional (CU) 特性とは、冷淡さと無感情を有する特性であり、the Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, 5th edition では素行障害の重症度を予測する特性の一つであるとされ国際的に注目を集めている。CU 特性を評価する尺度は複数存在するが、その中の一つである CU 特性尺度 (Inventory of Callous-Unemotional Traits : ICU) は 24 項目の質問紙であり、無料で利用可能であるという利便さから、21 か国語に翻訳され最も広く利用されている。しかし、ICU のどの項目が将来の素行障害を予測するのに有用であるかについて、国外においてこれまでに多くの研究が行われてきたが、未だに統一した見解は得られていない。また、国内では、ICU の標準化自体が行われておらず、素行障害の予防的な対処を立案していく上で必要なツールが整備されていない。そこで、本研究は国内の素行障害をはじめとする反社会的行動の予防的対処に寄与すること、海外で確認されている ICU の知見の信頼性・妥当性を確認することを目的として、児童・思春期の大規模前向きコホートデータを用いて検討を行った。</p> <p>【方法】本研究では、ICU の妥当性を検討するため、弘前市内全小中学校に所属する 6 歳から 15 歳までの児童、生徒 (10936 名) に対し親評価による ICU を施行し分析を行った。初めに ICU について因子分析を行った先行研究についてシステマティックレビューを行い、過去に示された因子モデルを全て確認し、確認的因子分析を行うことによって、その中で最も適合性が高いモデルを検討した。さらに ICU の妥当性を検討するために、最も適合性が高かったモデルについて、行為の問題や向社会性を下位項目に含む the Strengths and Difficulties Questionnaire : (SDQ) との横断的相関と、縦断的相関 (2 年後の SDQ スコアの得点) を重回帰分析にて解析した。</p> <p>【結果】親評価 ICU について因子分析を行った 8 つの先行研究で示された 15 の因子モデルについて確認的因子分析を施行した結果、12 項目の短縮版 ICU の 2 因子バイファクター (2 FBF) モデルの適合度が最も高いことが確認され (<math>\Delta df = 11</math>, <math>\Delta \chi^2 = 1109.66</math>, <math>p &lt; .001</math>)、この因子モデルは年齢 (6 歳～12 歳のグループ、13 歳～15 歳のグループ)、性別の影響を受けず、性別に関わらず幅広い年齢帯で使用できることが確認された。さらに SDQ との横断的相関では ICU における総得点、冷淡さ因子得点、無関心さの因子得点は SDQ の各因子と有意に相関を認めた。また重回帰分析における ICU と 2 年後の SDQ 得点との縦断的相関では、ICU 得点の高さは 2 年後の SDQ における各因子と有意に関連を示し、特に問題行動の高得点、向社交性の低得点を強く予測することを示した。</p> <p>【結論】我々は、親評価 ICU において、項目数を 12 項目に減少した短縮版 ICU の 2 FBF モデルが最適モデルであると結論付けた。またこの短縮版 ICU は学齢児童、生徒において、現在の問題行動の多さと向社交性の低さと有意に関連があり、また将来の問題行動の多さと向社交性の低さも十分に予測するものであると結論した。本研究の強みとして、本研究は親評価 ICU において、先行研究で示された因子モデルを網羅して確認</p>	

的因子分析を施行した初めての研究であったこと、また親評価 ICU の 2 年後の予測的妥当性を検討した初めての研究であったことから、結果には一定の価値があったものと考えられる。さらに親評価 ICU の因子モデルに年齢が与える影響を検討するために、大規模コミュニティで 6 歳から 15 歳までの幅広い年齢層を対象とした初めての研究であったことにも一定の価値があったものと考えられる。一方、本研究の限界として、大規模コミュニティサンプルを対象に高い回答率を得ているものの、一定数の脱落者は存在し、また脱落者についての情報は得られていない点が挙げられる。脱落者グループと参加者グループとの間に CU 特性に違いがある可能性を否定することができないため、本研究は CU 特性が低いグループを対象としていた可能性を否定することができない。さらに、本研究は弘前市という日本における一地方都市で施行されたものである。弘前市の平均収入は日本全体の平均収入とほぼ同様ではあるが、その経済活動、子どもの教育環境などは日本全体を代表するものとは言えず、本研究の結果を日本全体の結果と一般化するには注意が必要である。最後に、本研究では親評価 ICU のみの検討を行っている。低年齢の参加者に本人評価 ICU を施行するのは困難であると考えるが、今後は親評価 ICU だけでなく、本人評価 ICU、教師評価 ICU も対象とし、評価者の違いによる影響を検討することが望まれる。